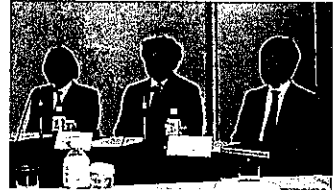


脳外科手術後の創痕まで責任をもつ医療普及を 整容脳神経外科研究会が積極活動を開始

「脳外科手術後の傷痕にも責任を持とう」。脳神経外科医や形成外科医が「整容」(Aesthetics)という新しい考え方をもって「日本整容脳神経外科研究会」を設立して1年経った。手術による治療だけでなく、術後の創痕までを一つの治療と考え、「Changeする脳神経外科」をキャッチフレーズに、積極的なアピールをはじめた。5日には東京・大手町で記者会見し、昨年2月の第1回研究会を主宰した日本医大脳神経外科の寺本明主任教授らにより、現状報告と今年6月に予定している第2回研究会の日取りが発表された。今後、本格的な学会まで発展させていく考え。



整容脳神経外科研究会記者会見
(左から寺本日本医大教授、太組日本医大武蔵小杉病院講師、菅原自治医大形成外科教授・2月5日東京・大手町レベル21で)

「整容」という考え方は海外ではまだ前例がなく、日本発の概念。わが国で一般に使われている「Aesthetics (エステティック) =美容」は、きれいな状態をより満足のいく状態にすることで、「整容」的な観点とは違う。そこで寺本教授らはあえて「整容」というなじみのない言葉を会の名称に付け、この新しい概念を正しく普及していくことを目指した。

記者会見では、寺本教授が研究会設立に関する趣旨説明。事務局を担当する日本医大武蔵小杉病院の太組一朗講師が整容脳神経外科分野の症例や高度な技術、患者のQOLについてスライド供覧。研究会の世話人で自治医大形成外科の菅原康志教授が「創傷ケアスペシャリスト形成外科からの提言」として形成外科医療の視点が脳外科医療に必要な理由を述べた。

研究会は形成外科とも連携し、十分なトレーニングを受けたコアとなる医師100人の育成を図り、技術認定も行っていく考え。また将来は精神科医とも連携をとり、創痕の再手術など不安や苦痛が取り除かれるまでの精神的なサポートにまで力を入れていき

たいとしている。

「整容」的手術の医療費は、もともと病気になった人の再建手術なので、基本的には社会保険適用になる。

6月6日に第2回日本整容脳神経外科研究会

第2回日本整容脳神経外科研究会は、6月6日(土)JR東京駅直結の「東京ステーションカンファレンス」で佐伯直勝千葉大脳神経外科教授が会長となって開かれる。テーマは「開閉創にも整容のこだわりを」。第1回は演題30題、参加80人だったが、第2回は100人の参加を見込んでいる。

「整容脳神経外科」に取り組んでいる大学

わが国で整容脳神経外科に熱心に取り組んでいるのは主として次の大学病院。札幌医大、東北大、山形大、自治医大、千葉大、日本医大、順天堂大、東京大、信州大、大阪大、大阪市大、岡山大、徳島大など研究会の世話人大学。日本整容脳神経外科研究会のホームページは <http://aens2008.umin.ne.jp/>。

寺本明日本医大脳神経外科主任教授(日本整容脳神経外科研究会発起人)の話

外科的治療における創痕に対して、今まで日本の医療システムでは各科ごとに対応してきた。また、海外でも「整容」といった考え方が存在しないため、脳神経外科だけでなく整形外科、耳鼻科などの表面に見える創痕を扱う科では、個人やクリニックのレベルでその対処法を蓄積してきた。そこでまずは、今まで個々に貯めてきた術前・術中の工夫や機器・材料の開発、術後慢性期における創痕の修復方法などを共有する体制をつくっていききたい。その上で、患者が期待している方向性を確認する調査を行い、医師と患者の方向性を合わせて整容外科治療の正しい普及を図っていききたい。